

降誕節第1主日礼拝説教「星の導く先を見る」

日本基督教団石神井教会 2017年12月31日

【旧約聖書日課】イザヤ書 49章7～13節

- 7 イスラエルを贖う聖なる神、主は、人に侮られ、国々に忌むべき者とされ
支配者らの僕とされた者に向かって、言われる。
王たちは見て立ち上がり、君侯はひれ伏す。
真実にいますイスラエルの聖なる神、主が、あなたを選ばれたのを見て。
- 8 主はこう言われる。わたしは恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた。
わたしはあなたを形づくり、あなたを立てて、民の契約とし、国を再興して
荒廢した嗣業の地を継がせる。
- 9 捕らわれ人には、出でよと、闇に住む者には身を現せ、と命じる。
彼らは家畜を飼いつつ道を行き、荒れ地はすべて牧草地となる。
- 10 彼らは飢えることなく、渴くこともない。太陽も熱風も彼らを打つことはない。
憐れみ深い方が彼らを導き、湧き出る水のほとりに彼らを伴って行かれる。
- 11 わたしはすべての山に道をひらき、広い道を高く通す。
- 12 見よ、遠くから来る、見よ、人々が北から、西から、また、シニムの地から来る。
- 13 天よ、喜び歌え、地よ、喜び躍れ。山々よ、歓声をあげよ。
主は御自分の民を慰め、その貧しい人々を憐れんでくださった。

【福音書日課】マタイによる福音書 2章1～12節

1 イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、2言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」3これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。4王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。5彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。

6『ユダの地、ベツレヘムよ、お前はユダの指導者たちの中で、決していちばん小さいものではない。

お前から指導者が現れ、わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』

7そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。8そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。9彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。10学者たちはその星を見て喜びにあふれた。11家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。12ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通して自分たちの国へ帰って行った。

「お生まれになった方はどこに？」

2017年最後の主の日の教会の営みの日を迎えました。先週の日曜日にクリスマスの祝いの礼拝を朝と夕とにささげてから一週間。世の中は、クリスマスの装いから、あつという間に、新年を迎える年越しの装いに変わってしまいました。しかしながら、教会は、今日もまだ、クリスマスの装いのままです。年越して今週いっぱい、「公現日」と呼ばれる1月6日まで、クリスマスの飾りを片付けません。クリスマスの祝いの中で新年を迎えるという、古くからの習慣に倣っているのです。

ところで、年末年始は、牧師にとってもひと時の休息をいただく機会になっていますが、そうは言っても、クリスマスの祝いを終えた達成感や、開放感に浸っていただけるわけでもありません。このときに、わたしどもは、たくさんの奉仕者の皆さんと共に準備し整えて迎えたクリスマスの祝いの礼拝や営みの一つひとつを思い起こしながら、いわばひとり反省会をして過ごしているのです。ことに、クリスマスの祝いの礼拝には、教会の皆さんばかりでなく、ふだん教会にはあまりおいでになられないような方も、少なからずおいでくださっていました。その方々に、教会は、クリスマスの御子をお示しすることができただろうか。御子キリストならぬ別のものに目を向けさせてしまったのではないだろうか。

教会の皆さんは、どうでしょうか。クリスマスにおいでになられた方々に、わたしたちは、問われていたのです、「クリスマスにお生まれになった方は、どこにいらっしゃいますか？」と。それに、応えることができていたでしょうか。

あるいは、信者ではない皆さんにお聞きしたいのです。わたしたち教会は、クリスマスの祝いを通して、クリスマスにお生まれになられた方がどこにいらっしゃるのかを、皆さんにはっきりとお伝えすることができていたでしょうか。

教会に、いつも小さな幼児を連れておいでくださっている方がいます。今年は、ご家族の中で新しい命が誕生したとのご報告をくださった方もありました。幼子がいるというだけで、わたしたちは、喜びや希望を与えられるように思います。もちろん、子を育てる親や家族は、ただ喜んでいられるばかりではいられないでしょう。赤子を迎えた家族は、今まで通りでいるわけにはいかないのですから。家族は、新しく迎えた幼子を中心にするために、変わらなければいけません。否、おのずと変えられる、と言ったほうが良いかもしれない。赤子を迎え、幼子がいるということは、家族が皆、今までとは違う新しい者に変えられることなのです。そして、その変化は、周囲にもおのずと伝わるものでもあるでしょう。

不幸にして、そのような変化を拒み、子の存在を否定した悲惨な結果をもたらす事件が知らされることもあります。あつてはならないことです。

教会は、新たにクリスマスを迎えました。新たに幼子キリストを迎えたのです。それは、教会がまた新たに換えられるときを迎えた、ということです。クリスマスの祝いのうちに新年を迎える教会は、今まで通りではなく、新しく換えられるのです。御子キリストをますます中心とする新しい者に変えられて、「ここにクリスマスにお生まれの方がいらっしゃる」と見ていただけるようになるのです。

星を見て

今日の福音書日課は、クリスマスの降誕物語の中でも、伝統的に「公現日」に読まれてきた一場面です。東の国から占星術の学者たちがやってきて、母マリアと共にいらっしやった幼子イエスを訪ね、礼拝し、贈り物を献げました。

この「占星術の学者たち」は、「博士」「賢者」とも訳される人々で、必ずしも胡散臭い人たちではありません。当時の最先端の天文学に習熟した、知識人としての特別の地位にあった人々です。ただ、聖書の世界に生きていた人々ではありませんでした。聖書の世界観から言えば「異邦人」と呼ばれる人々、神を知らぬ人々でした。そのような人々が、自分たちの知識を頼りに、一人の幼子、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方」を探し訪ねて来たというのです。

クリスマスの祝いは、このように訪ねてくる人のためにこそある、と福音書は告げているのでしょうか。わたしたちが考えるような信仰深い人々ではなく、別の世界観に生きているような人々です。そのような人であっても、クリスマスの祝いへと誘われていることを、わたしたちは見てきました。クリスマスは、今年も、世界中で、教会の枠を超えて祝われたのです。それは、わたしには、神の情熱の現れであるように思えます。神が、クリスマスを教会の中だけに留めておかれずに、世界中にもたらしてくださっているのです。幼子の誕生という物語と共に、世界中の人々に、神は、クリスマスをお届けくださったのです。

そのような世界中の人々の中の幾人かを、わたしたちは、教会にお迎えすることができたでしょうか。すでに教会に招かれ、聖書の示す神を知る者とされ、さらに多くの場合、キリストと結ばれる洗礼へと導かれてきたわたしたちです。聖書を通して、神の言葉を聞き、御子キリストと出会わせていただけると信じているわたしたち教会は、教会とは異なる世界に生きている現代の「占星術の学者たち」をお迎えする働きを、担わされているのではないのでしょうか。

いいえ、わたしたち自身、そのようにしてここに辿り着いたのではなかったのでしょうか。自分の知識に従って、自分の道しるべとなる「星」を頼りに、自己流に歩んでいた者が、あるところで聖書の御言葉と出会ったのです。占星術の学者たちが、ユダヤの律法学者たちと出会い、聖書の預言の御言葉を聞くことになったように、です。わたしたちは、実際、すでに洗礼を受けたキリスト信者だとしても、いまだに、あの占星術の学者のようなところがある者かもしれないと思います。今でも、聖書の御言葉よりも自分の知識や経験に頼り、自分の「星」を頼りに、御子キリストを探し訪ねているところがあるのです。それでも、わたしたちは、日曜日ごとに教会に集められて、聖書の御言葉の指し示すところへと目を向けるように導かれてきたのです。

神は、そのような「星」をも用いて、すべての者を、幼子キリストのもとにお導きくださろうとしているのです。もちろん、聖書の御言葉も用いて、です。数知れない星々の中で、そのような「星」のしるしを見出すことができるならば幸いなことです。そのような「星」を見出した人に必要なことは、別の「星」ではなく、聖書の御言葉の指し示すところに向かわせる導き手ではないのでしょうか。

別の道を通って行く

クリスマスの祝いの余韻の中で、行く年を終え、新年を迎えようとしています。わたしたちは、新年に対する希望を抱いています。新しい年の歩みが、平和、平穩、安全、安心のうちにあることを願っています。神社に初詣に参らなくても、教会で元旦礼拝をささげなくても、わたしたちは、新年を迎えるにあたって、そのような希望を抱き、願いを祈るでしょう。

けれども、クリスマスを祝って新年を迎えるわたしたちに、神がお示しくくださるのは、ただ前年と変わらず平穩無事に過ぎていくだけの一年ではありません。わたしたちが迎えようとしているのは、新しい神のご計画が行われる、新たな主の御年なのです。

クリスマスの物語の終わり、占星術の学者たちは、幼子に訪ね当たり、贈り物を献げて、自分たちの国へ帰って行きました。もとの生活へと戻っていったのです。ただ、それは、何もかもが元通りになったということではなかったでしょう。彼らは、「別の道を通って…帰って行った」というのですから。クリスマスに御子と出会い、御子を迎え、御子と共にいるようにされた者は、もはや、今まで通りの道に行くことはないのです。別の道、新しい道が、備えられているのです。

学者たちには、その別の道は、夢で告げ知らされました。ヘロデのところへ帰らない、別の道です。その道は、ヘロデのところではなく、御子のところへと帰る道なのではないでしょうか。自分の国、自分の生活に戻りながら、なお繰り返し、立ち帰るべきところを、他でもない御子のところとする道、なのではないでしょうか。

彼らが、先立つ星に導かれてたどりついた幼子キリストは、ただ一度訪ね行き、献げものをして礼拝を遂げれば、それで終わり、というお方ではなかったでしょう。彼らの宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬、すなわち自分たちの手にあるものの中の最上のものを贈り物として献げるようなお方だったのですから。自分の中の最も大切にしていたものを差し出さないではいられないようなお方だったのですから。いいえ、そのお方は、まことの幼子でいらしたので、そのようにしか為し得なかったはずなのです。赤子を迎えた母マリアのように、幼子を迎えた父ヨセフのように、学者たちも、最上のものを差し出す者に変えられないわけにはいかなかったはずなのです。

わたしたちが迎える新しい年は、わたしたちに備えられた「別の道」です。幼子イエス、御子キリストを中心に迎えた者が、他に選ぶようなない道です。幼子キリストと共にいるようにお与えくださった神は、わたしたちの行くべき道を、すでにご計画くださっています。それは、わたしたちがまだ通ったことのない「別の道」です。それは、ヘロデのところに至る道ではなく、御子にこそ立ち帰り続ける道です。その道は、わたしたちの最上のものをお受けいただくに値するお方が共に歩み、導いてくださる道なのです。

新年を迎えます。今こそ、夢を見させていただきましょう。神が、わたしたちの行くべき新しい別の道をお告げくださるはずなのです。